

諸国人にとっての江戸

——社寺参詣者を中心として——

山本 光正

はじめに

- 一 社寺参詣者と江戸
- 二 江戸近国人にとっての江戸
おわりに

はじめに

全国の総城下町である江戸は、多くの人口を抱える一方、各地の人々が訪れる所であり、来ることを余儀なくさせられた所でもあった。

前者の代表は、社寺参詣などの旅の一環として江戸に立ち寄るもので、江戸に数日滞在し、江戸の各地を見物して旅立って行く場合

がほとんどであった。

後者の代表は訴訟のため江戸に来ざるをえない人々である。彼らのほとんどは江戸に長期間滞在しており、訴訟に関する用務は毎日あったわけではないから、余暇を利用して江戸の各地を回ったりしている。

強制的に江戸に来させられた人々に参勤交代などの武士がいるが、本稿においては極力「士」以外の階層を対象としたいため、これについては除外した。

このように様々な理由で移動する人々によって、江戸に限らず諸国の情報が各地にもたらされたわけであるが、本稿においては江戸に短期間滞在した人々の行動範囲、即ち彼らが何を見たのかを中心に述べてみたい。職業の関係から江戸に滞在し、仕事を通してみた

江戸を各地に伝えたことは重要であるが、社寺参詣などの途次江戸に立ち寄った人々の情報はまだ江戸を見ぬ地域の人々に、江戸の印象を強烈に与えたのではないだろうか。

また本共同研究の学習会において中心的に取り上げた江戸橋広小路についても、近国の人の立場から若干触れてみたい。

一 社寺参詣者と江戸

(一)

江戸を訪れた人々の大半は短期滞在者であったと考えられる。彼らは長途の旅、伊勢参宮の途中江戸に立ち寄ることが多かった。このためまず近世の伊勢参宮がどのように行われていたかを、東国の人々を中心としてみてみたい。

伊勢参宮の旅日記をもとに、参宮者の旅程を分析した先駆的なものに小野寺淳氏の業績がある。⁽¹⁾その後拙稿及び桜井邦夫氏により研究が進められている。⁽²⁾

伊勢参宮のルートをどのように把握するかについては、三者の間で若干の相異がみられるが、旅程のおよその基本的パターンは次のように行われていた。

在所—江戸—鎌倉・江の島—藤沢—久能山—掛川—秋葉山

—鳳来寺—宮—佐屋—桑名—伊勢—奈良—吉野—高野山—大坂—京—草津（中山道に入る）—善光寺—追分—在所

このコースに西国巡礼や金毘羅・厳島などが付加される場合も多くあった。街道は東海道と中山道が利用され、これに鎌倉・江の島、秋葉山などの名所旧跡がセットされている。この外東北の太平洋沿岸の人々は鹿島・息栖・香取・成田などを見て江戸に入っているが、筆者はこれを地域旅行圏が長途の旅に組み入れられたものと考えた。

伊勢参宮といえは旅の代名詞といってもよいほどであるが、多くの日数と費用を必要とするものであった。そのため大都市を中心に数泊の旅行圏ができあがった。たとえば江戸の場合鎌倉・江の島・成田等々の旅がある。成田参詣は少し足を延ばせば香取・鹿島・息栖を回ることができる。地域旅行圏の発達により交通施設も充実し、伊勢参宮のような長途の旅のコースに取り入れられていったのであろう。

桜井氏は伊勢参宮の行程を次の三つに分類している。

① 伊勢往復型

② 近畿周遊型

③ デラックス型

①は単に伊勢を往復するだけ、②は近畿地方の多くの社寺を回

る、㊦は近畿圏を脱し金毘羅や時には九州まで足を延ばすものとしている。このうち㊧は三春藩の場合で、同藩は旅の日数を定めており、伊勢参宮は三三日で、これでは日程的に伊勢往復しかなかなかったとしている。また㊨㊩は費用面からの分類といってよからう。この分類が適切であるか否かは別として、伊勢参宮が一定の枠内で行われていたことを知ることができるわけである。

(二)

ここでは旅の一環として江戸を訪れた人々の日記八点を取り上げ、旅行期間及び江戸における行動を中心に紹介したい。

①

史料名

東岡仙参宮日記⁽³⁾

筆者

出羽国村山郡楯南村 安孫子周蔵

旅行期間

明和八年三月八日―八月一日

江戸における行動

三月二二日江戸着

三月二七日浅草本堂―五重塔―三社権現―両国―常盤橋―大名

小路―麴町―麴町天神―愛宕山―増上寺―深川―三十三間堂―八幡宮(富岡)―洲崎弁天

三月二八日両国(船)―羅漢寺―亀戸天神―秋葉―弘福寺―牛御前―三囲稲荷―回向院―浅草―吉原(道中を見る)―浅草門跡(東本願寺)

下谷五条天神―上野仁王門―山王権現―本堂―日暮里―道灌山―朝日山(飛鳥山)―金輪寺―滝野川弁天―駒込吉祥寺

越後屋―聖堂―水戸百間長屋―桜の馬場―神田大明神―上野―

医学講所

七月一四日江戸着

七月一五日軽業見物

七月一七日両国見物

七月一九日石摺五枚購入

七月二二日江戸発

②

史料名

参宮道中記⁽⁴⁾

筆者

出羽国村山郡高屋村 今井幸七

旅行期間

安永六年十一月二八日―安永七年三月三日

江戸における行動

二月八日江戸着、馬喰町二丁目かりまめや茂右衛門泊

二月九日永代橋―深川八幡宮―洲崎弁天―羅漢寺―亀戸天神

―花園大明神―回向院―両国橋―夜に吉原見物

二月一〇日浅草観音―三社権現―東門跡―上野薬師堂―御三

家御霊屋―山王大権現―不忍弁天―湯島天神―神田大明神―大

名小路

二月一日日本橋―増上寺―泉岳寺―東海道

③

史料名

伊勢参宮道中日記⁽⁵⁾

筆者

陸奥国宇多郡新沼村 四栗士須衛

旅行期間

文化一三年二月一日―文化一四年二月五日

江戸における行動

二月二日江戸着、橋本町四丁目江口屋仁右衛門泊

二月一三日神田明神―雲雲寺―湯島天神―上野―浅草―妙見

―亀戸天神―無縁寺^(同向院)―五百羅漢

二月一四日丸の内―愛宕大権現―増上寺―神明―大名小路

(相馬屋敷)―越後屋・布袋屋・大丸屋・大和屋・蛭子屋・大

黒屋

二月一五日泉岳寺―東海道

④

史料名

富士道中日記帳⁽⁶⁾

筆者

上野国那波郡戸谷塚村 飯嶋英水

旅行期間

文政一〇年閏六月二四日―七月九日

江戸における行動

七月四日江戸着、泉岳寺―増上寺―神明大明神―愛宕山―京橋

―諸々見物―日本橋―馬喰町三丁目信濃屋与市泊

七月五日吹屋町芝居見物―新吉原(船)―両国

七月六日浅草観音―浅草門跡―上野東叡山―蓮池^(不忍池カ)弁財天―湯嶋

天神―稲荷大明神^(糺カ)―神田大明神―丸の内(案内人付)

七月七日本郷―駒込―王子稲荷―帰途

⑤

史料名

伊勢参宮花能笠日記⁽⁷⁾

筆者

出羽国村山郡寒河江 渡辺安治

旅行期間

文政一一年一月一八日―五月一四日

江戸における行動

二月三日江戸着、馬喰町三丁目信濃屋与市泊

二月一六日聖堂―神田明神―湯島天神―池の端弁天―上野山下

―知人宅―東門跡(東本願寺)―観世音(浅草)

二月一七日知人宅―深川八幡―洲崎弁天―五百羅漢―梅屋敷―

亀戸天神―妙見堂―三册稻荷―弘福寺―牛の御前―白髮明神―

木母寺―梅若塚―真先^(正本)稻荷―神明―待乳山聖天―駒形観世音

二月一九日江戸発

⑥

史料名

伊勢参宮道中記⁽⁸⁾

筆者

陸奥国会津郡保城村 小椋氏

旅行期間

嘉永三年一月九日―三月一七日

江戸における行動

一月二六日江戸着、馬喰町三丁目浪花講土屋平兵衛泊

一月二七日神田大明神―妻恋稻荷―湯島天神―不忍弁天―東叡

山―東本願寺―浅草観音―吾妻橋―柳島妙見―吾妻森権現―梅

屋敷―亀戸天神―回向院―両国橋(案内人付)

一月一八日芝居見物―大名屋敷見物(大名小路)―山王権現―

愛宕山―増上寺―神明―泉岳寺―小山町山王権現(案内人付)

―東海道

⑦

史料名

道中日記帳⁽⁹⁾

筆者

陸奥国会津郡関本村 渡辺吉蔵

旅行期間

安政三年二月一日―四月一七日

江戸における行動

二月七日江戸着、小網町白子屋勘助泊カ

二月一一日江戸出立、この間の見物地を記すも、日程は不明

五百羅漢―亀戸天神―浅草観世音―両国橋―増上寺―松坂屋・

白木屋・多びす屋・ほてい屋・大丸・越後屋―神田明神―湯島

天神―蓮池弁天―東叡山―芝神明―東御門跡―霞跡(つぐみ)―深川八幡
―洲崎弁天―三十三間堂―愛宕山―寅門金毘羅大権現―泉岳寺

⑧

史料名

道中行程日記帳⁽¹⁰⁾

筆者

山形県村山郡下飯塚村 武田伝之助

旅行期間

明治七年十一月二七日―明治八年二月一五日

東京における行動

一月三十一日泉岳寺を見て宿へ、蔵前蓬木屋弥兵衛泊

二月一日浅草寺―東本願寺―報恩寺―寛永寺―湯島天神―御城

内(大蔵省通りぬけ)―日本橋―両国橋(知人の案内)

二月二日吉原見物

二月三日行動不明

二月四日芝居見物

二月五日東京出発

①の『東岡仙参宮日記』は原史料通りの名称ではなく、寒河江方面で一般に呼ばれている名称である。この旅日記は『いせ参宮道中

小つかい覚帳』、『東岡仙伊勢参宮』、『見聞録』の三冊からなっている。このうち『いせ参宮道中小つかい覚帳』は毎日の支出を丹念に記したものであり、『東岡仙伊勢参宮』は旅そのものの記録というより、旅先で聞いた話が主である。『見聞録』は旅先の話の外、江戸や京都などでの行動を記してある。

筆者は楯南村名主安孫子久右衛門の次男安孫子周蔵で、俳号を東岡と称した。安孫子家は代々酒造業を営み、東岡は安永六年一月三十六歳の時に分家している。彼は『藻屑集』・『世の恩集』・『俳諧初心手引草』などを著すほどの俳人であった。

明和八年の旅は周蔵の外に弟の千長、医師山村玄悦(山村月巢の父)が一緒であった。一行は三月八日に出発し、日光・江戸・京・大坂・奈良・伊勢に達し、再び江戸に出て八月一日に帰郷している。

東岡一行の旅の目的は当然伊勢参宮であるが、この外池大雅に依頼しておいた扁額の揮毫を受け取りに行くことにもあった。

一行の江戸における主な行動を『いせ参宮道中小つかい覚帳』で見ると、到着したその日に「しは居札せん」として六四文を支出、二六日「龜戸凶巻杖」を一六文で購入、二七日は案内人に「なら茶」を振舞い、二九日は両国から羅漢寺までの船賃と亀戸での昼食代、案内銭、四月一日は相撲札銭、四月三日には「朝日山ノえんぎ

「壹枚」代金を支出している。

その日の支出をその日に書き記すことは旅先では困難であったろうが、『見聞録』の日程とは少々矛盾がある。但し『見聞録』に記された行程、特に二八日の行動は一日では回りきれなかったであろう。二八日の行程には段落が設けてあるが、これは原文の通りであり、恐らく三日に渡っての見物かと思われる。

一行は三月二七日に浅草及びその周辺、大名小路そして麴町に出ているが、これは知人に逢うためのようである。それより愛宕山・増上寺さらに方向を転じて深川方面と見物のコースとしては遠回りをしていくようである。

二八日のコースは、先にも述べたように、羅漢寺から東本願寺までで一日、下谷五条天神から駒込吉祥寺までで一日、越後屋から医学講所で一日の計三日を要したのだろう。『見聞録』によると、「よし原へ見物、昼ハさびし、しかし道中ヲ見ル、夜ニ入テにぎやかなり」とあり、吉原に何度か足を運んだのだろう。

『見聞録』は単に見物コースを書いただけでなく、目にした神社仏閣等についても記している。記すといっても「浅草本堂廿壹間程、天上ノ竜七八間程、安信筆、五重塔あり、三社権現堂あり」というように神社境内の配置や大きさなどを述べている程度である。彼らの目にはこうした神社仏閣以上に雑踏、人込みが目についたらしく、

く、「浅草両国のはんじゃうハ言語ニのべがたし」、「神明（飯倉神明宮、港区芝）へ参ル、門前にぎわし」「不忍の弁天あり、蓮あり、大池なり、開帳にぎやかなり」とその様子を書いている。小遣の支出からも判るように、見物のうち二度程は案内を雇っている。

帰途江戸に立ち寄った際の記述は『見聞録』には記されておらず、『いせ参宮道中小つかい覚帳』に簡単にメモされている程度である。二度目の時は軽業を見、両国見物をしているが、主な目的は土産品等の買物にあつたらしく、七月二〇日には荷物用のごさを購入している。

②の『参宮道中記』の筆者は出羽国村山郡高屋村の今井幸七が書き残したものである。在所を出発した一行は江戸を見物した後、伊勢、西国巡礼をし、中山道から日光に出て帰郷している。

一二月八日に江戸に到着した一行は、翌九日深川方面を振り出しに、亀戸・両国方面を回り、夜吉原見物をしている。この日の昼の案内料が一五〇文、吉原の案内料が七二文かかっている。

一〇日は浅草寺を中心とした辺りから、上野・湯島天神・神田明神・大名小路を見物し、最終日は日本橋から増上寺・泉岳寺に立ち寄り東海道を伊勢に向っている。見聞したことについてのコメントはほとんど記されていないが、どういふわけか泉岳寺の料金の支払いについてのみ次のように詳しく記している。

「是ヲあかむニ、寺へ願へ、かぎを借り、老人前六文宛出ス、是ハかぎヲかいすときニ出スへし、則はか所ハ少し坂ヲ登り、門ヲあけ入る也、(以下略)」

また泉岳寺は東海道沿いとはいえ、旅人にはその所在が判りにくかったのか、「則せんがく寺を尋ぬるニハ、江戸出口左ニ海ヲ見る所ニてたつぬべし」と書き留めている。

③は中村藩(相馬藩)領新沼村の四栗士須衛の記したものである。四栗士須衛は四栗太郎右衛門の子供で、同家は新沼村の在郷給人であり、同村の肝入をも勤めた。旅に出た文化一三年に士須衛は二一歳で、旅の総勢は一六名であった。

一行は鹿島・息栖・香取・成田を途次見物し、江戸には一二月一二日に到着している。翌日湯島方面から上野・浅草・亀戸・五百羅漢を見物している。行程からみて亀戸天神―無縁寺―五百羅漢というのは納得し難い。おそらく無縁寺を一番最後に訪れたのだろう。

一四日は大名小路に行き「相馬屋敷へ参り候て、」とあり、相馬藩邸において休息していることがわかる。それより日本橋周辺の越後屋をはじめとする呉服店を端から見物している。まさにデパート見物である。一五日に江戸を出立して泉岳寺を見、伊勢に向けている。

④は上野国那波郡戸谷塚村の飯嶋英水が記したものである。現在

知ることのできる範囲では、飯嶋氏の旅日記は文政一〇年閏六月の『富士道中日記帳』を初めとして、慶応元年まで一三件の日記が残っている。このうち一件は清書本である。この旅日記には英水・吉清・義清と最終頁に記されていることから、英水は号で、本名は吉清・義清と名乗っていたらしい。英水の旅日記はこの外主なものに伊勢・大和・大峰・四国方面、長崎方面、出羽三山方面のものがあつた。英水は文政十年に二三歳とあるから、出羽三山方面へ旅をした慶応元年には六一歳であった。彼は長途の旅の外、上州及びその近傍も旅をしているから、単なる旅好きというより旅行家といえるかもしれない。このため英水が旅に対して初々しかったと思われる文政一〇年の旅は、江戸での行動をある程度記しているが、以降の日記は江戸における記述は数行で終わっている。

さて英水は文政一〇年閏六月二四日に在所を立ち、甲州道中に出て富士山に登り、矢倉沢往還を通って大山・江の島・鎌倉を経て七月四日江戸に入っている。このため見物も泉岳寺が最初になり、増上寺・飯倉神明・愛宕山を見て宿に到着している。

翌日は芝居を見物し、夜は案内人を雇い吉原を見物している。六日は浅草・上野・湯島天神・神田大明神・丸の内(大名小路である)を見物している。これも案内人を雇っている。最終日は道筋の名所を見つつ王子に出、それより中山道に入り帰郷している。

⑤は出羽国村上郡寒河江の人で、渡辺安治の父吉兵衛は紅花をはじめ、京・大坂と商取引を行っていた家である。旅の同行者は渡辺茂吉・安孫子周蔵・安達祐治の三名で、渡辺茂吉は安治の弟らしい。安孫子周蔵は①の筆者の孫にあたり、安達祐治は素封家で、彼の妹は安孫子周蔵に嫁いでいる。四人は親しい友人同士であったらしく、年齢も祐治三〇歳、周蔵二六歳で、安治と茂吉も同じような年齢であったと思われる。

一行が江戸に到着したのが二月三日で、江戸を立つのが同月一日であるから、江戸に一七日間滞在していたわけである。この間明らかに江戸見物を目的として行動したのは二月一日と一七日の二日間であるが、一行は江戸に知人が多かったらしく、各所に出かけている。たとえば一四日の記事は次のように記されている。

上横町尾台良佐様并平田淳庵老道一子見舞ニ参る、帰りニ馬喰町壹丁目下野や伊助方へ参、岡ノ栄七子へ懸御目候、昼時長後様同道ニ而両国柳町河内や方ニ而誹諧書画之会席へ参、暮時宿へ帰る。

一行のうち渡辺安治は和歌を、安達祐治は俳号を芦暁斎と称するなど、彼らは地域における文化人でもあったため、江戸との繋りもかなりあったのだろう。一六・一七日の江戸見物は浅草・隅田・深川方面に片寄っているが、他の名所・旧跡などは各所に出かけたお

りに訪れているのだろう。

⑥は旧会津領南山保小屋の木地屋小椋氏が伊勢参宮をした時のものである。日記の標題は『伊勢参宮道中記』となっているが、実際は木地屋縁りの地を歩くことが目的であったらしく、伊勢参宮のあと高野・吉野・奈良・大坂・京都を見物した後、蛭谷・君ヶ畑など木地屋の近江根元の地を回っている。

一行は総勢一名で、嘉永三年一月一日に江戸に到着し、翌日は上野・浅草・亀戸方面を、一日は芝居を見物し、そのあと大名小路から永田町の山王権現・愛宕山・増上寺・泉岳寺などを回り、その足で江戸を離れて川崎宿に宿泊している。

⑦は会津の関本村渡辺吉蔵の記したのだが、彼の家については不明である。旅をした時の年齢は二五歳で、国許を立つ時は一人であったが、途中江戸で四人、東海道興津宿で五人が合流し、計二人になった。

一行は七日に下総の関宿から船で「にのい」まで来ている。「にのい」は現江戸川区の二之江であろう。これより小船に乗り「江戸羅漢前＝上り」というから、この日のうちに羅漢寺及び亀戸方面を見物しているのだろう。以後は二月一〇日までの間、江戸各所を歩いているが、何日に何処を回ったのかは不明である。彼の日記の中で特に詳しく記しているのは橋の長さである。

一 東橋 長サ九拾間

一 兩國橋 長サ九拾六間 但し（麻葉珠）き星付也

右のように日本橋・今川橋・正平橋（高カ）・京橋・永代橋・新大橋・大

川橋の長さを記録している。他地域、特に大坂を見物した時も橋のこ
とを記してはいるが、江戸ほど詳しくはない。彼は巨大都市江戸を
流れる川に多くの橋が掛けられていることに驚いたのだろうか。橋
の長さを記したのは江戸にいかにな大きな橋が数多くあるかを表現す
るため、彼は橋以外の建造物の間口、奥行も丹念に書いている。

一行は江戸を立ち、伊勢・熊野三山・金毘羅・大坂・京・奈良を
回り、善光寺を回って帰国している。

⑧は江戸というより東京における行動である。筆者の家は近世に
おいては出羽国村山郡下飯塚村の名主を代々勤めており、伝之助の
父は医者としてもその名を知られていた。

同行は五人で彼らの旅程は在所から日本海側に出て、高田から善
光寺に詣で、中山道を通って京都・大坂・姫路・高野・吉野・奈良
・伊勢を回り、明治八年一月三十一日に東京に入っている。

二月一日に江戸見物をするが、案内は知人（伯父らしい）に頼み、
浅草・上野・湯島・江戸城内・日本橋を見物している。但し寛永寺
は明治元年官軍と彰義隊の戦により伽藍は焼失してしまっている。

二月二日は一日かけて吉原の見物をしている。これまでの旅日記

には吉原見物のことがしばしば出てくるが、どの程度まで見物がで
きるのかは記していない。本日記にはそのあたりのことが詳しく書
かれているので、長文にわたるが引用しておこう。

一新吉原

揚屋中村長兵衛

是ハ大家ニして五蓋井楼、五階宮、数丈の楼に登りて四方
の万里を見下し、況や羽前の空へ帰国之事のみ思ひ遣て、
指をさして一見也、夫より下つておいらんの部屋へ、帯
なる障子の穴より覗見てふつたまげ、

一同軒並

金瓶・大黒座敷

右両家ハ東京一の女郎家ニして、入口より直、つと入て鬼
有り、部屋ニ而茶杯を吞て控ひたり、実に田舎の育といへ
でも、ぼん脳（ぼんぼん）の雲はれやらで、何んの恐るゝ事あらんや
と、先異人遊君酒宴の間ト称し、座敷一見仕るに、大鏡荘
りて然も一對の巻物有り、式法の額を置、数台の角鏡ニ己
か数を移して、先次の間一見、又今紫と称し、新ニしつら
い毛せんをす（し）いて有り、天井のもよふハ紫の紋にして立派
也、是ハ諸侯方御遊楽の間ト相見得たり、又奥座敷ハふし
ん最中なり、又おゐらん住居の部屋へを透し見ルに、大
鏡を荘り、髯台・手箱・衣短（襦袢）司等ハ、金か銀かハ知らねど
も、玉をあざむく有様なり、別に圍屋有りて、宛も夜着ハ

もよふ付、遊女寝姿を見るに、いとびっくりして、こそ
 〳〵と其家を逃去ル、斯なる座敷一覽しけるも伯父様の案
 内にて、錢一文遣わず見物する。

この日記は明治のものであるから、そのまま近世の状況を表して
 いるとはいえないが、遊廓の内部まで見物をさせてくれたようであ
 る。但しこの時の吉原の建造物は近世のものではない。吉原は何回
 も火災により焼失しているが、慶応二年一月四日にも火災が発生
 し、二年間の仮宅営業をしている。⁽¹¹⁾

以上紹介した八件の旅はいずれも徒歩による旅であり、楽しみと
 しての旅であるが、江戸には諸国の廻船が集り、多くの乗組員達も
 江戸の地を踏んだ。ここではその事例としてアメリカ彦蔵の場合を
 みてみよう。⁽¹²⁾

彦蔵は嘉永三年九月初旬、継父の船住吉丸に乗り、兵庫から江戸
 に向った。彼は途中で知人の乗る栄力丸に乗り換え、江戸の地を踏
 んでいる。上陸した彦蔵は二名の乗組員に連れられて、初日は浅草
 周辺の見物で終っている。二日目は亀戸方面、三日目は芝居を見物
 している。見物地が極めて少いが、一行は単に観光地を回るとい
 より、遊んでいる。たとえば次のような過ごし方している。
 そして、そこら^(浅草奥山)一帯には講談師・軽業師・手品師・街頭役所・弓
 場・ノゾキエ、がある。

これらのものを余すところなく見物して、とあるから、浅草だけ
 で一日を費してしまうのも無理はない。船員達は物見遊山で江戸に
 来るわけではなかったし、久し振りで陸に上がったわけであるか
 ら、見物より遊びに重点が置かれたのは当然のことであろう。

(三)

江戸に長期滞在した事例として、近江国滋賀郡本堅田村庄屋錦織
 五兵衛義蔵の場合を、『東武日記』⁽¹³⁾によってみてみよう。義蔵は慶
 応二年三月一七日から五月二五日まで江戸に滞在している。長期滞
 在の理由は東海道大津宿の助郷役免除の歎願のためである。

義蔵は『東武日記』以外に江戸往復の記録として『中山道十四垣
 根』⁽¹⁴⁾と『東海紀行』⁽¹⁵⁾を残しているが、『中山道十四垣
 根』のために江戸に来たのは大庄屋の辻八良兵衛・郷士惣代の木村
 歎願のために江戸に来たのは大庄屋の辻八良兵衛・郷士惣代の木村
 保三郎、大津よりの才領伊之助そして義蔵の四人であった。

江戸に到着した一行は麴町の上野屋惣助方に宿を求めるが、「后
 之家四人とも一夜の辛抱不叶相困り候事、何ともあしき旅宿也」と
 いう有様であった。そこで翌日親しい間柄であったらしい麴町の岩
 城升屋の紹介で、平川町式丁目の川越屋文左衛門方に移動してい
 る。

江戸に到着してからの数日間は歎願の用意等で忙しく、三月二一

日の条には「日々種々相認物多クシテ余リ見物ニハ不出候ナリ」と記されている。彼らが見物を目的として外出したのは同月二三日のことである。この時は両国回向院及び両国の各種見せ物を眺め、「見世物小家夥數人大群集せり」と、その混雑ぶりを記している。

三月二十六日には湯島―上野―東本願寺―浅草―三囲稻荷周辺と、伊勢参宮者らが歩くコースを回っている。その後牛御前の辺りから小船に乗り、山谷で酒宴を催し吉原に向っている。この日の帰宅は夜八ツ半頃となり、吉原から駕籠で帰宅しているが、「道中処々メ切御門并御番所有リテ困ル」と、帰路難渋したことを記している。

以降四月七日に新宿・市ヶ谷方面、一〇日には赤坂御門から愛宕・増上寺方面を見物している。この間、そして以降も用務の合い間を利用しては各所を回っているが、なかでも注目されるのが江戸城見物である。四月二五日義蔵は知人の誘いにより江戸城西の丸二の丸の普請が完成したということで、城中見物をする機会を得た。このことについては『東武日記』の解題を記した熊倉功夫氏も、『幕末という時代がいかに人々の好奇心を強める要素をそそぎこむ時代だったとはいえ、一介の農民（町民というべきだが）が堂々と西ノ丸、二ノ丸の奥深く見学に歩けたとは、想像を絶する事実である」と指摘している。

長期滞在をしていると、当然のこと乍ら自分の生れ育った環境と

江戸の比較を書き留めるようになってくる。その主なものを日を追って掲げてみよう。

三月二十九日

△但江戸ノ牛車ハ上方ノ車トハ周リ一尺斗リモ小キ也

四月八日

△因ニ曰、ひりうすヲがんもどきト云也、

四月一七日

一江戸表ハ山ノ手亦は下タ町ト唱候、何ニテモ珍ら數品物はスベテ下タ町ニ有リト云々、

一上料理屋至テ少シ、下料理店ハ多シ、男女は上方ヨリアシク見ユ、

一風呂屋髪結床至テ多シ、町毎ニ有人多シ、髪結至テ下手ナリ、

一上こんぶ一切無之ニ付、こんぶ出シ喰ス事ナシ、
一水引至テアシク、○但真紅○金赤ノ水引一切ナシ、

比較とはいっても日常の些細なこと、東に対する西の優越感を記す程度ではあるが、一方では江戸の巨大さ、何処にでも群をなす人々がいること、江戸城内を見たためか將軍の居城たる江戸城に対する畏敬の念を書き記している。こうした見聞や経験が核となり一つの江戸観、東西の比較論が形成され、国許に帰って地域の人々に語

り継がれたわけである。

(四)

江戸に短期間滞在した旅人の事例を中心に紹介してきたが、彼らが回った主な観光地をまとめたのが江戸における主要見物地一覧である。

主な観光地のなかには現存しないもの、場所が移動してしまったものなどいくつもある。このうち通称五百羅漢、天恩山五百大阿羅漢禪寺は現在ある羅漢寺と混同するので若干述べておきたい。

羅漢禪寺は本所堅川の南にあり、黄檗派で元禄八年の創建である。開山は鉄眼禪師、中興は象先和尚、松雲禪師を開基の大祖とするという。本寺が観光地として人気を集めた理由の一つは等身大の五百羅漢木像、一つは三匠堂である。羅漢像の寄進者には桂昌院、浅野赤穂藩主、紀伊国屋文左衛門らがいる。三匠堂は「さざみ堂」とも呼ばれ、廊下を螺旋状に昇って行くと三階に出、降りるときは昇ってきた道を通らず降りることができる建物である。

人気を博した羅漢禪寺も弘化三年の風水害や、安政二年の地震により荒廃し、明治二〇年に緑町(墨田区)に移転し、同四年には目黒不動の隣に移転した。現在江東区の区民センター前に建つ羅漢寺は西多摩郡奥多摩町から昭和に入って移転してきたものである。⁽¹⁶⁾

旅人が江戸で見物をした所を細大洩らさず書き記したとは考えられないが、たとえば亀戸方面を歩いているのに、この方面のことをまったく記さなかったということはなからう。①の安孫子氏は泉岳寺に回った記述がないし、②の今井氏にしても、愛宕には回っていないが見物に行っているだろう。④の飯島氏は数多くの旅をしていること、江戸にも何度か来ていることから、この旅の以前又は以降に一覧表に掲げたような観光地を見て回ったであろう。⑤・⑦についても同様のことがいえる。⑧の武田氏の場合は明治という時期であり、江戸⇨東京の観光地が変化し、近世の旅人が立ち寄った所は遠隔地の人々にとって観光地から外れたとも考えられる。

吉原の場合、場所が場所だけに実際に行っても書き記さないことが多かっただろう。

江戸観光コースの地域を大きく分類してみると次のようになる。

③・⑤・⑥はいずれも神田―上野―浅草を回り、③と⑥はそのあと亀戸まで足を伸ばし、それより両国に来ている。この3グループはいずれも初日にこのコースを回っている。

②・④・⑧は前者の逆コースで、浅草―上野―神田に出ている。それより②は大名小路、④は丸の内、⑧は江戸城内から日本橋と、ほぼ同じような方角に向っている。②・④はこのコースを二日目に歩いている。

主要見物地一覧

旅行グループ番号	江戸における主な見物地	神田明神・湯島天神方面	不忍池・寛永寺・上野方面	東本願寺	浅草寺等浅草方面	両国橋近辺	回向院	三囲稲荷周辺	亀戸天神方面	羅漢寺	吉原	大名小路	越後屋等・呉服物	屋見物・買物	愛宕山権現社	増上寺周辺	泉岳寺	深川八幡	州崎弁天	飛鳥山方面
①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

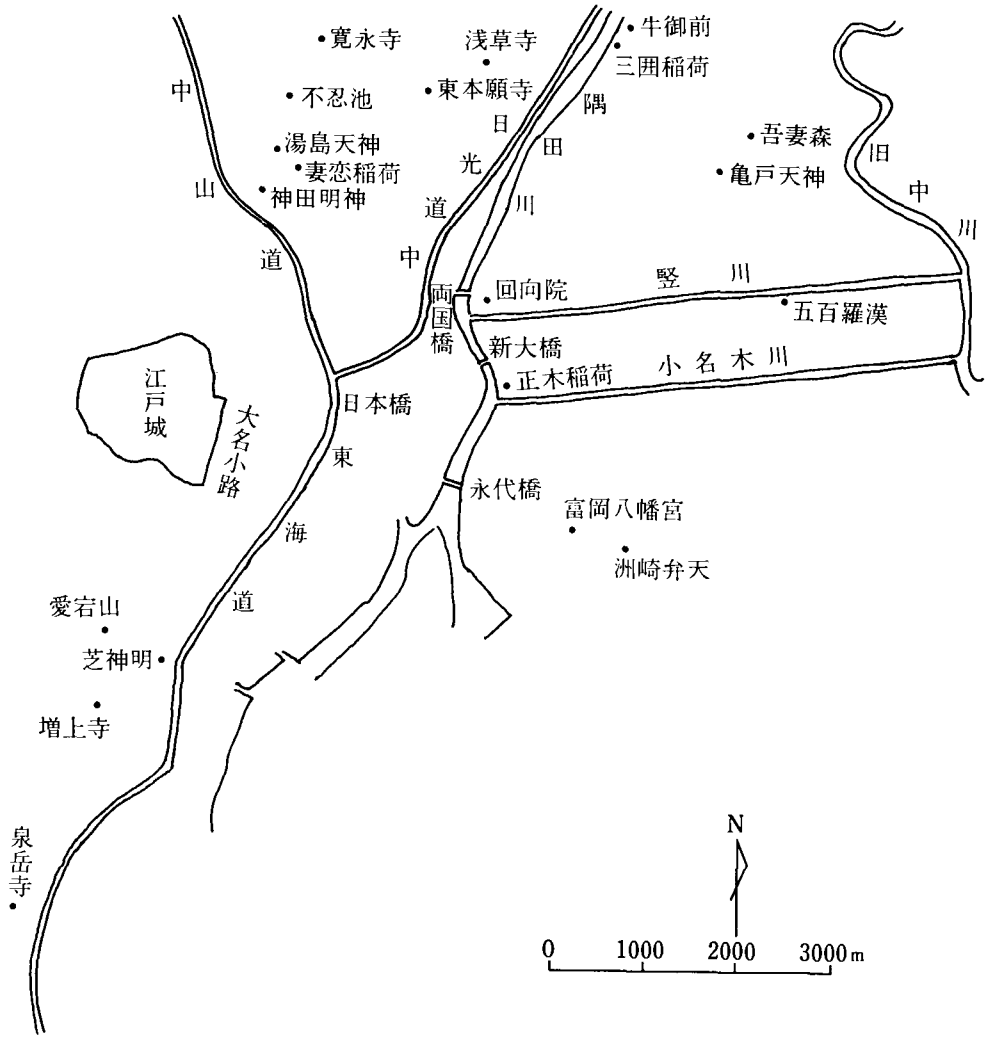
②・⑤は深川・亀戸そして両国又は駒形方面を巡っている。
 ③・④・⑥・⑧は東海道沿の増上寺等を見ているが、当然のことだが、上方方面から江戸に入ったグループは初日に、上方方面に向うグループは最終日に歩いている。

各グループが歩いた地域を地図におとしてみると、①のように比較的長く江戸に居たグループは別として、ほぼ江戸城を中心にして右側、それも北東の地域が社寺参詣者らが江戸で見て回った観光地であったことが判る。

一定地域を見て回った原因の一つに、この地域には何か所もの多くの人々が集まる所、—浅草・両国・日本橋近傍等々—があったからである。旅日記の多くには人が多かったこと、賑やかであったことが記されている。アメリカ彦蔵も浅草の印象を次のように記している。¹⁷⁾

幾千もの人々が往来し、あまりの雑踏に、私はまったく気が落ち着かなかつた。それゆえ、先任土官の手にしっかりとしがみつき、まず右を見、つぎは左といった具合にして、何でも見ようとした。

両国についても人が多かったことを書いているが、江戸の名所とは極論すれば江戸の巨大さであり、それを象徴するものが何か所もある雑踏であった。



主要見物地位置図

さらに先述したように、『東武日記』にも「何ニテモ珍ら敷品物はスベテ下タ町ニ有リ」というように人の目を引く品々が店先に並び、人混みの中をウインドショッピングができる地域であったためである。

こうした江戸の観光地を、遠隔地の人々が容易に回ることができたのであろうか。旅日記の紹介にもあったように、多くの旅人は案内人を頼んで、または江戸の知人等の案内により、さらにグループの中に江戸を知る人がいて、歩いたものと思われる。多くの江戸のガイドブックが出版されていたとはいえ、本を片手に歩くことは不可能であつたらう。

江戸での旅人の行動をみるため、本稿では八点の旅日記を例示したが、これらはすべて東国を中心としたものである。これは意識的に東国の旅日記のみを収集例示したわけではなく、必然的な結果である。江戸近国の人々は扱置き、東国の人々が江戸を見物するといつても、そのほとんどは江戸以外の地の社寺参詣―伊勢参宮が最も多かったであろう―の途中に立ち寄つたものであつた。

これに対して西国の人々にとって江戸は伊勢参宮のついでにという距離ではない。さらに当時の最大の観光地である社寺を江戸まで態々見にくる必要など無い。以上のことから、江戸を見た人間が多かつた地域と、江戸を見ることが少なかつた地域とが存在したこと

がわかる。

一方長期滞在者―といっても本稿では僅か一例であるが―の中でも西国、それも京、大坂に距離的にも、文化的にも近い地域の人々は、江戸を西の文化に対抗するものとして見ていた。そこに一種の優越感を抱いたにしても、江戸の巨大さ―將軍の地といふことは否応なしに認識して江戸の地を去つたであらう。

二 江戸近国人にとっての江戸

遠隔地の人々に対し、江戸近国の人々と江戸との関り―旅またはそれに類した観点から―はどうであつたらうか。

ここでは上総国望陀郡大谷村の農民朝生家を事例として取り上げてみたい。大谷村は久留里藩領に属する村で、城下町久留里より東に徒歩四〇分程の所に位置する。石高は近世後期には二八一石余、人口は五〇余戸で周囲は低山に囲まれている。

朝生家は大谷の名主を交代で勤める家で、安政頃から明治二〇年代に至るまで、親子二代に渡つて日記を綴つて⁽¹⁸⁾いる。

この日記によると、大谷村の人は少くとも二名が毎年江戸に行つてゐる。それは虎の門の京極家内にある金毘羅代参のためである。大谷村における金毘羅代参がいつ頃から行われていたのかは明らか

かではないが、代参の経過を慶応三年の朝生家の日記によりみてみよう。少々繁雑になるが、代参者の決定から帰途までを、日記をもとに追ってみよう。これにより久留里周辺の人々の江戸に対する関わり方、感覚を知ることができると考えるからである。

慶応三年正月に行われた鬮で朝生家の当主八郎兵衛は金毘羅代参の鬮を引き当てている。八郎兵衛の外に政右衛門が鬮に当たっている。「酒迎」や御神酒・掛け銭など、代参に伴う諸行事は前年の代参者が担当している。落鬮者にはそれぞれ講から一貫五百五十文が交付されている。

代参者のうち政右衛門は都合により、代参の権利を市右衛門の悴金之助に譲っている。この外八郎兵衛の妻もと、八平の妻をみちが代参に同行するようになった。をみちは久留里藩江戸屋敷に御台所御枕方として勤める夫のもとに行くのが目的であった。八郎兵衛の妻もとが同行するのは、二男熊治郎の結婚衣裳を江戸で調えるためである。をみちが同行するようになった経緯は不明である。

八郎兵衛らは正月九日に代参に出発した。八郎兵衛の妻もとは二男の熊治郎が、八平の妻をみちは簪の平治が馬に乗せて木更津まで送っている。

婚礼の買物も兼ねた八郎兵衛夫妻の所持金は次の通りであった。

覚

正月九日
一金四拾貳兩貳分也 八郎兵衛持参

同外ニ少々
一銭七貫文 当百ニ而 同人持参

外ニ少々文久セに

正月九日
一同拾兩也 もと持参

外ニ少々

同
一銭貳貫文 同人持参

両名合わせて五十兩余と九貫文余の銭である。これほどの金銭を懐中にして江戸に出るといふことは、彼等にとって江戸が身近なものであったということであろうか。

一行は六ツ時に大谷村を立ち、木更津に九ツ頃到着し、船問屋伊勢屋九兵衛方に入り、ここで昼食をとり、船の手配をしている。ここで八郎兵衛は御年玉として金一朱を九兵衛に渡していることから、従前より両者は面識があったのか、村としてこの伊勢屋を利用していったのかのどちらかであろう。

船賃は解代が二人分百三十二文、大船賃は木更津船が二人分貳朱と二百文で、八ツ時頃出航し、夜の四ツ時頃神奈川に到着している。神奈川に到着したのは荷船であったためという。神奈川に到着した船客は馬に乗り神奈川宿の新羽屋に泊っている。船客のすべてかどうかは判らないが、乗客のうち新羽屋に泊った同乗者について次のように記されている。

……神奈川新羽屋源兵衛宅へ泊り、上サ大谷村四人、くるり下町石屋治助、戸崎村若者一人是へ江戸神田ニ奉公致候ニ付行、同国真里谷村金井台酒とふじ一人メ七人泊り、(中略)九日夜神奈川にはやニ而下町治助殿ニ酒馳走ニ相成

七名は連れ立って新羽屋を出立し、品川宿で三名の同船者と別れ、七ツ時前に虎の門の金毘羅に到着している。

七ツ時前金毘羅様江参詣仕候、御札九拾枚代七百四拾八文払、夫々芝愛宕山増上寺所々見物致、西の御丸内へ旅人と不通、右ニ付江戸とし参り、くるり仲町川俣屋を江戸居り候娘へ着物遣シ候ニ付、八郎兵衛頼れ着物江戸とし鈴木や持参致候処、くるり仲町藤崎屋娘并第卯之吉居合、右式人江川俣屋を頼れ候着同屋娘方へ御届ケ可被下候様相頼、川俣屋を御手紙御座候義相渡相頼置、江戸とし鈴木屋出立、四人ニ而下屋御屋敷黒田筑後守様御台所御枕方相勤居候八平殿方へ行一宿致、此時八平殿女房参り、酒肴・そは御馳走被下候、滝村可ん兵衛殿そは被下候、大谷村勤番長左衛門合せ参り呉申候

一行は代参を済ませ、各所を見物し江戸橋の鈴木屋に赴いている。これは久留里仲町の川俣屋より、江戸に居る娘に着物を渡すように依頼されたためである。一行が鈴木屋に到着すると久留里仲町の藤崎屋の娘と弟が居合せたため、川俣屋からの頼まれ物を彼等に

渡している。藤崎屋の娘と川俣屋の娘が頻りに交流があったためであろう。一行はその夜は黒田氏の江戸藩邸に勤める八平方に宿泊している。

八郎兵衛夫妻と金之助は翌一月十一日早朝に藩邸を出て各所を見物し、五ツ時頃駿河町越後屋で八郎兵衛の二男熊治郎の婚礼用衣裳などを買い求め、代金三十一両一分を支払っている。八ツ時頃昼食のため越後屋二階に上り酒食のもてなしを受けている。越後屋は注問の品をすぐに仕立るといわれているが、この時はどういう事情でか即仕立が叶わず、「右品物早速仕立相成不申候ニ付、無是悲品物請取、暇乞して」と記している。

続いて一行は上野広小路の松坂屋に向い、ここで唐棧織一反を購入、下谷で半紙、酒を買い求め、一泊した八平に酒と半紙を礼として置いている。この外藩邸には大谷村のものも働いているので彼にも半紙を贈っている。八平の妻をもとも帰国するというので共に藩邸を出、妻恋稲荷・神田明神を参詣し、須田町で図書、縮緬切れを、本石町で柳籠、脇差、下谷で鼻緒を購入しているが、この時隣家で鼻紙を購入した際金子三分二朱を紛失している。

これより一行は再び江戸橋に戻り乗船するが、以下は原文を引用しておきたい。

暮六ツ時江戸橋上総屋へ参り、今晚船乗致度咄シ候処、かつさ

屋御承知被下候、半紙吉状海賊橋ニ而買、四人上総屋ニ而夜飯致、此分八平殿ニ上総国主人ノ伯父様故、またごせん四人御取不被下候ニ付、半紙吉状金式朱御年玉として遣シ申候処、此義御取不被下候、御馳走ニ相成御礼を申、暇乞して乗船致、江戸ニし会所帳附せん一人十六文、としけ一人百文ツ、右せん式人分式百三十式文払、夜四ツ時頃乗船、無程出船、品川下江船留、大寒ニ而難洪致居申候、

右の記事により木更津方面の住民と密接な関係にある舟宿が少くとも二軒はあったことを知ることができる。しかも帰途の世話になった上総屋は八平の伯父にあたる店であった。なお「江戸とし会所帳付せん一人分十六文」とあるのは、木更津船乗船に際して住所氏名を記す手間賃であろう。

出船した木更津船は品川下で留っているが、これは夜明けを待っての出航のためであろう。明六ツ時前に品川下を出航し、四ツ時頃に木更津に到着し、ここで澁油・蒲団・筆墨・菓子を買求め、夜に入って大谷に戻っている。

時代は前後するが、安政六年六月に名主職を退いた八郎兵衛は、四国の金毘羅に旅立ち、参詣を終え七月二九日に江戸に到着している。

夫ハ江戸上野へ出、先東叡山様参詣致、旅つかれゆへ直江戸と

しへ七ツ半時着、松屋泊り、またご代式百六拾四文、此時龜山柳瀬前糺屋主人始て酒呑合、酒肴代式百廿四文、是ハ八郎兵衛出ス、八月朔日早朝江戸とし側ニ而月代刺セン三十式文、帶くげせん百拾式文、松屋ニ而朝飯いたし夫ハ五ツ時ノ所々見物出て(中略)八月朔日夜五ツ半時乗船、としけ代廿四文、大船式百文、八月二日九ツ半時木更津へ着船

上総の久留里というより、木更津を中心とした辺りの人々にとっての江戸は適当な行楽としての地であり、時として高額な買い物をする場であった。そして木更津周辺地域と江戸との仲介役を果たしたのが江戸橋広小路の船宿であった。江戸橋広小路に關し、大熊喜邦氏は江戸のマーケットと位置付け、「その昔賑かな一区画をなしてゐた」と述べている。

江戸橋広小路は確かにマーケットの機能を有し、さらに床見世では小間物・古本・煙草入等々小物を販売していたが、ここに遠隔地からの旅人が寄った様子が無い。恐らくこの地域は旅人がその賑いを遠くから眺める地であって、立ち入れる所ではなかったのではないか。両国辺りとは機能を異にする江戸橋広小路は、江戸人が日常の買物をする所であって、他地域の人間としては、房総や三浦半島の人間が入り込むことができた所であろう。

虎の門の金毘羅に來た八郎兵衛等はこの時江戸橋広小路の鈴木屋

と上総屋と接触を持っているし、安政六年に四国に旅した時は帰路江戸橋広小路の松屋に泊っている。しかもここで久留里藩領亀山の人と始めて逢ったといつては酒を交している。当所は江戸のマーケットであると同時に、少くとも木更津方面の人々にとって江戸における基地であったといえよう。

おわりに

江戸を見物した人々の多くは、伊勢参宮など社寺参詣の途中立ち寄る場合がほとんどであったようであるが、彼らのすべてといつてよいほどが江戸城を中心として北東の方角を主として回っていた。その主な観光地は神田・湯島方面、上野、浅草、両国、亀戸、深川方面と、増上寺等東海道に沿った社寺などであった。但し本稿においては、甲州道中を利用した人々の史料の分析をしていないことを断っておく、この地域には繁華の地が何か所もあり、江戸を訪れた人々はこうした所を見て歩くことにより、巨大都市江戸を実感しただろう。

江戸を見た人々は、それも短期間に江戸を見て回ったのは東国の人々が圧倒的多数を占めたとみられる。將軍の居住地としての巨大で繁栄を極めた一たとえそれが表面的なものであったにしても一江

戸を見た人々は、江戸の巨大さの中に將軍の権力をみたのではないだろうか。

江戸を見た人の多少が、同一地域内の階層別によるものではなく、地域差それも東国と西国とに大別されるわけだが、江戸を見たか否かは、人々の幕府に対する認識に何らかの差異を生じさせたものと考ええる。

一方西国の長期滞在者の場合、江戸を東と西の差というか、西が常に優位でありたいという先入観により江戸を見、東西の比較論を作り上げて帰国したのであろう。

本稿では生涯に一度か二度ぐらいの旅をした人々を対象としたかったが、史料の上から現段階では不可能であったことを断っておく。

注

- (1) 小野寺淳「伊勢参宮道中日記の分析」『東洋史論』2号、昭56
- (2) 拙稿「旅日記にみる近世の旅について」『交通史研究』13、昭60
- (3) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」『駒沢史学』34、昭61
- (4) 寒河江市史編さん委員会編『寒河江市史編纂叢書』第23集、昭52、同市教育委員会発行
- (5) 右に同じ。
- (6) 小暮知清編『伊勢参宮道中記』(相馬郷土研究会資料叢書第八輯、昭47、相馬郷土研究会発行)
- (7) 国立歴史民俗博物館蔵

- (8) 橋本鉄男校訂『伊勢参宮道中記』(日本庶民生活史料集成20、昭47、三一書房発行)
- (9) 田島町史編纂委員会編『田島町史』四巻民俗編 昭52、田島町
- (10) 山形市史編纂委員会編『山形市史資料』38、昭50、山形市
- (11) 西山松之助外編『江戸学事典』昭59、弘文堂
- (12) 山口修訳『アメリカ彦蔵自伝』一 昭39、平凡社
- (13) 熊倉功夫校注『東武日記』日本都市生活史料集成七 昭51 学習研究社
- (14) (15) 両書とも同右八に収録、昭52
- (16) 鈴木繁三校注『江戸名所図会』六 角川文庫 昭43 角川書店、江戸川区教育委員会『江東区の歴史』昭51 同委社会教育課
- (17) 山口修訳『アメリカ彦蔵自伝』一 昭39、平凡社
- (18) 朝生家の日記及び他の史料は、現在千葉県君津市立久留里城史料館に寄託されている。
- (19) 大熊喜邦著『江戸建築叢話』昭22、東亜出版社

(本館歴史研究部)